

ヤコブの 12 人の息子の名前に啓示されている 「キリスト証言」

ベレーシート

●今回取り上げる「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」の私の主題は、**ヤコブの 12 人の息子たちの名前の中に啓示されているキリスト証言**です。12 人の子どもたちに対する父ヤコブの預言とモーセの祝福がありますが、それについての考察ではなく、息子たちの名前に隠されているキリスト証言です。それは父ヤコブ、そして彼らの母たちの思いとは別枠にあるものです。ヤコブの妻であったレアとラケルの夫に対する愛をめぐる相克から名づけられたその大部分は母親が子の名前をつけていますが、とても個人的、かつ自己本位です。しかし彼女たちの思いや意図を越えたところに、キリストをあかしする神のメッセージがあるのではないかというミドゥラーシュです。

(1) ヤコブの 12 人の息子たち

●以下の二つの図をご覧ください。大祭司の胸当て(エポデ)に埋め込まれている 12 の宝石と両肩にある金の細工の二つの宝石の配置には二つのパターンがあります。【図 1】は**出生の順**であり、【図 2】は**行進の順**です。

【図 1】 エポデの前と後ろを繋げるための二つの肩ひも(出 28:7, 39:4)



右肩には、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、
左肩には、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン



【図 2】 荒野での**行進の順**
最初がユダ族で、
最後はナフタリ族となっ
ています。

3	ゼブルン	2	イッサカル	1	ユダ
	エメラルド		トパーズ		ルビー(赤めのう)
	זבולון		ישראל		יודא
					
6	ガド	5	シメオン	4	ルベン
	ダイヤモンド		サファイヤ		トルコ玉
	גד		שמעון		רבן
					
9	ベニヤミン	8	マナセ	7	エフライム
	紫水晶		めのう		ヒヤシンス石(オパール)
	בנימין		מנשה		אפרים
					
12	ナフタリ	11	アシェル	10	ダン
	碧玉		しまめのう		緑柱石(翡翠)
	נפתלי		אשר		דן
					

(2) 12 人の息子の最初と最後の名の中にある「ベーン」

●下記のチャートにあるヤコブの 12 人の息子たちの順序は**出生順**です。

No.	母親	子の名前	ヘブル表記・読み	意味	テーマ
1	レア	ルベン	「レウヴェーン」 רְאוּבֵן	御子を見よ	聖書の中心
2	(ラハ)	シメオン	「シムオン」 שִׁמְעוֹן	(御子に)聞け	聴従
3		レビ	「レーヴィー」 לֵוִי	(御子と)結びつく	一体・共感
4		ユダ	「イエフダー」 יְהוּדָה	(御子を)賛美する	賛美・感謝
5	ビルハ	ダン	「ダーン」 דָּן	(御子は)さばく	王なる支配
6	(ヅラ)	ナフタリ	「ナフターリー」 נַפְתָּלִי	(御子は)戦う	苦難の勝利
7	シルバ	ガド	「ガード」 גָּד	(御子は)告げる	福音の告知
8	(ヅラ)	アシェル	「アーシェール」 אָשֶׁר	(御子は)幸いな人	繁栄
9	レア	イッサカル	「イッサハール」 יִשָּׂכָר	(御子は)報いを賦与	励まし
10		ゼブルン	「ゼヴルーン」 זְבֻלֹן	(御子は)賜物を賦与	崇敬
11	ラケル	ヨセフ	「ヨーセーフ」 יוֹסֵף	(御子は)祝福の拡大	苦難と繁栄
12	(ラハ)	ベニヤミン	「ヴィンヤーミン」 בְּנֵימִן	御父の右に座す御子	権威と信頼

●最初と最後に注目してください。最初の「ルベン」と最後の「ベニヤミン」の名前の中に、それぞれ「子」を意味する「ベーン」(בֵּן)という語彙が組み込まれています。つまり、12 人の息子の名前全体が、「ベーン」(בֵּן)という語彙に枠づけられて(囲まれて)いる格好です。ここでいう「子」とは、**神の御子イエシュア**をあかししていると考えられます。この御子イエシュアこそ、聖書の全巻における中心人物であり、あかしされるべき聖書の主題です。なぜなら、神である主、あるいは御座についておられる方が、「わたしはアルファであり、オメガである」「最初であり、最後である」「初めであり、終わりである」と語っているからです(黙示録 1:8、21:6)。

(3) イエシュアを証言する聖書

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 39 節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証しているものです。

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 25~27 節

25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられないものたち。

26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」

27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 44 節

そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。

わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

●「子」がいるということは、同時にそこに「父」がいなければなりません。聖書はこの「父と子」のゆるぎない信頼関係を「永遠のいのち」ということばで表しています(ヨハネ 17:3)。「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合って存在しているのです。御父は、御子によって世界を造り、天と地における「万物」「見えるものも見えないものも」「天と地にあるすべて」、それらは御子によって存在している「ひとつの家」なのです。その家の中に、神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のみわざをゆだねられた御子によってなされます。「子」は「父」のすべてを啓示する存在です。

●その「子」(御子)であるイエシュアが、「**聖書はわたしについて証している**」と述べていますが、どのようなかたちで証しされているのかと言えば、

① **予型的な出来事**を通して

例えば、「過越」「紅海徒渉」「荒野の経験」「捕囚と解放」「いけにえ制度」など。

② **メシアを表わす預言的語彙**を通して

例えば、「女のすえ」「赤いひも」「マナ」「岩」など。

③ **メシア的詩篇**を通して

例えば、詩篇 1 篇、2 篇、8 篇、22 篇、24 篇・・・110 篇など。

④ **人物や地名などのヘブル語**を通して

例えば、「メルキゼデク」「ベツレヘム」「エルサレム」など。

●聖書そのものではありませんが、**聖書全 66 巻**を通しての「キリスト証言」の文書や説教。

例えば、アリス・メリー・ホッジキン女史の「六十六巻のキリスト」(訳者;笹尾鉄三郎)。

小林和夫の「著作集第 1～第 3 巻」に収録されている『聖書 66 巻のキリスト証言』など。

●「聖書はわたしについて証している」とするならば、聖書のどの箇所を切ったとしても、金太郎飴のように、そこに御子イエシュアがいなければなりません。それを見出すことによってイエシュアの御名がより高く挙げられなければなりません。それが主にある者としての最高の務めであり、神への礼拝なのです。そして教会における説教者の務めは、常に、キリストを中心とする説教が語られ、説き明かされ続けなければならないと信じます。しかしそれは決して容易なことではありません。というのは、真理の宝は地下深くにある鉱脈に隠されており、掘り出す者がいなければ決して見出すことができないからです。キ

リストの弟子は真理の宝を捜し出す学者でなければなりません。以下にあるとおりです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 13 章 52 節

そこでイエスは言われた。「こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」

1. 「12」という数に秘められた御国の奥義

●さて、ヤコブの 12 人の息子たち。なぜヤコブに 12 人の息子が与えられたのでしょうか。それは決して偶然ではなく神の必然があるからです。「12」という数は聖書において神の**主権**を表す数字であり、神の**完全な統治・支配**を象徴しているからです。聖書にある「12」という数を拾い集めてみると以下のようになります。

- (1) 苦い水に一本の木を投げ入れると甘い水になった。その後エリムの **12 の泉のほとり**で宿営(出 15:27)。
- (2) 大祭司の胸当てを飾るエポデには **12 の宝石**が埋め込まれ、それぞれの部族を表していた(出 28:21)。
- (3) ヨルダン川を渡った後、カナンの地での祝福を記念して、**12 の石**を取って記念とした(ヨシヤ 4:8)。
- (4) ダビデは神殿で仕える祭司の組織を、**12 を二倍にした 24 の組**に分けている(I 歴代誌 25 章)。
- (5) ソロモン神殿には **12 頭の牛**が鋳物の海を支えていた(I 列王記 7:25)。
- (6) メシア王国でのエルサレムの **12 の門**は、イスラエルの民が諸国を支配する(エゼキエル 48:30~35)。
- (7) イエシュアが **12 歳**のとき、イスラエルの教師たちの真ん中に座り、問答をしていた(ルカ 2:46~47)。
- (8) キリストの再臨後に、イエシュアの弟子たちはイスラエルの **12 の部族**をさばく(マタイ 19:28)。
- (9) 十字架の前に置かれたイエシュアは、**12 軍団**よりも多くの御使いを支配することもできた(同 26:53)。
- (10) 神の御座の回りには **12 を倍した数の 24 人の長老**たち、また、**12 の部族のそれぞれにつき 1 万 2 千人の合計 14 万 4 千人**に神の刻印が押され、その者たちが神を礼拝しています(黙示録 4 章)。
- (11) 「聖なる新しい都エルサレム」には **12 の門、12 の真珠、12 の御使い、12 の部族、12 の土台、12 の使徒**たちの名、しかも都の一辺の距離は **12,000** スタディオンであった(黙示録 21:12~21)。
- (12) 「聖なる新しい都エルサレム」の大通りの中央を流れるいのちの川の両岸にはいのちの木があり、**12 の実**がなっている(黙示録 22:1~2)。

●このように「12」という数字は、聖書においては「**神の所有の民を支配する**」象徴的な数です。それゆえ、ヤコブの 12 人の息子たちを一枠として、そこに神のメッセージが隠されているかもしれません。今回はそこに焦点を当ててみたいと思います。

●以下、ヤコブの息子たちの名前の中に隠されているキリスト証言を見て行きますが、あくまでも彼らの名前において証言されているキリストです。彼らの人格、彼らのした様々な悪や失敗のことを考えるなら、それにつまずくことになり、キリスト証言が見えなくなります。長子のルベンはラケルの女奴隷のビルハ

と寝たことで長子の権利を喪失し、シメオンとレビはシェケムという町で自分たちの妹のディナにされた屈辱を晴らすために、その町の男子をだまして殺しました。ユダも異邦人の女と結婚し、決してほめられる者ではありませんでした。そのようなイメージを払拭せずにいると、これからしようとしている彼らの名前に啓示されているあかしを受け入れることはできません。

●ある方が詩篇を瞑想して行く上でつまずきとなったのは、詩篇の表題にある「ダビデ」という名前でした。その方はこの「ダビデ」が犯した道徳的な罪を思い起こすことで、詩篇を瞑想することが妨げられてしまいました。ダビデに対するイメージを払拭することができなかったからです。ですから、そのようなことにならないように気をつけなければなりません。つまり、神の啓示について、個人的な思いや感情を持ち込まないことです。

2. 12人の息子たちの名前に見るキリスト証言

(1) 「ルベン」・・・「子を見よ」

●ヤコブの最初の子、長子ルベンの名は「レウーヴェーン」(לְוִיָּוֶן)で、母レアの長男です。その意味は「子を見よ。」です。創世記 29 章 32 節には「ルベン」が生まれた時の告白が記されています。

【新改訳 2017】創世記 29 章 31～32 節

31 【主】はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれたが、ラケルは不妊の女であった。

32 レアは身ごもって男の子を産み、その子をルベンと名づけた。彼女が、「【主】は私の悩みをご覧になった。

今こそ夫は私を愛するでしょう」と言ったからである。

●「ルベン」の名前にはレアのきわめて個人的な悩みが隠されています。主が私の悩みをご覧になったということで「ルベン」と名づけられたのですが、似たような経験をした女性がいます。それはアブラムの妻サライの女奴隷ハガルです。彼女がみごもったことで女主人のサライを見下げたために、サライは彼女をいじめて家から追い出します。ところが主の使いは荒野の泉で彼女を見つけ、サライのもとに帰るように諭します。そして生まれて来る子をイシュマエルと名づけるように命じて預言をします。その時、ハガルは自分に語りかけて下さった主の名を「エール・ロイー」(אֵל רוֹי)と呼びました(創世記 16:13)。その名が意味することは「私を顧みられる神」という意味です。

●ハガルにしても、レアにしても神が自分のことを顧みて下さった、自分の悩みをご覧になったという共通の経験がありますが、レアの子「ルベン」の名前の意味は、なぜか「子を見よ」という意味なのです。とても不思議なことです。母の思いを越えた名前になっているのです。つまり、個人的な意味合いではなく、預言的な意味合いになっているのです。「ルベン」を文字通りに解釈すれば、「見る」の「ラーアー」(רָאָה)の命令形「レウー」(לְוִי)と「子」を意味する「ベーン」(בֶּן)が組み合わさっている名前なのです。

ここでの「子」は「御子イエシュア」のことを証言していると考えられます。

●そもそも「子を見よ」と語っているのはだれでしょうか。御子イエシュアをこの世に遣わし、そのイエシュアが公生涯に就くために、バプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、「天が開け、神の御霊が鳩のように下って」来るのをイエシュアはご覧になりました。そして天から告げる声が聞こえたのです。「また、これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ 3:17)。ギリシア語原文では「すると、見よ。天から告げる声。『これは、わたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ(満足する)』」となっています。

ここでの「見よ」は、ギリシア語の「イドゥー」(ιδού)。ヘブル語にすると「ヒンネー」(הִנֵּה)です。また「わたしの愛する子」のヘブル語は「ベニー・イエディーディー」(בְּנֵי יְדִידִי)です。そしてこの「子」は、「わたしの喜びとするとところの子」なのです。「喜びとする」は「ラーツァー」(רָצָה)の分詞。その名詞は「ラーツォーン」(רָצוֹן)で、それは「際立った喜び、満足、好意、受容」を意味します。私たちは御父が喜びとする御子について、より深い次元において「見る」必要があります。

●新約聖書のヘブル人への手紙の鍵語は 12 章 2 節にあるように「イエシュアから目を離さないでいる」ことです。つまり、イエシュアだけに「目を注ぎ」、イエシュアだけを「仰ぎ見る」必要があります。「目を離さない」「仰ぎ見る」「見つめる」「目を注ぐ」と訳されている原語は、ギリシア語の「アフオラオー」(αφοραω)です。新約聖書ではこの箇所と他にもう一箇所にしか使われていません。聖書には一つしか使われていないことばがあります。ひとつしかないということによってそれを無視してはなりません。数が少なくても、それはひとつの個性であり、何か大切なものを秘めているということがあるのです。そしてそれはとても重要です。そんな発見をしながら、ことばのもつ意味を考えることは楽しいことです。

●「アフオラオー」(αφοραω)をヘブル語に換言すると「ナーヴァト」(נָוַת)という言葉が使われています。いずれもイエシュアに目を注ぐために、ほかのすべてのものを見るのをやめることを意味します。真のキリスト者とは、完全な集中力をもって、イエシュアを見つめ(仰ぎ)、驚きのまなざしをもって見ることです。それはまさに恋人が愛する人をうっとりときみつめている様子に近いかもしれません。私たちの心を散らす一切のものから目をそむけて、ただイエシュアにのみ目を注ぐという姿勢(生き方)です。愛するというのはそういうことではないでしょうか。夫婦でも、自分の連れ合いにではなく他の人に目が行っていたとしたら、いい夫婦になれる保証はありません。目移りしていたのでは良い関係を築くことはできません。ましてや愛の関係を持つことはできません。そのような意味において、御父は御子を「見」、御子は御父を「見て」おられるのです。私たちが御子イエシュアを「仰ぎ見る」ということは、イエシュアを本当の意味で愛しているということであり、愛しているならば「仰ぎ見る」ということは決して難しいことではないはずなのです。

●さらに、イエシュアに向けられる「まなざし」としての「目」は私たちの体の一部分ですが、聖書において「目」という場合、それは存在全体を表します。イエシュアは言われました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 6 章 22～23 節

22 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、

23 目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。

24 だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。

●自分が今直面している問題や周囲の状況にばかり気を取られたり、あるいは自分自身や自分の弱さにばかり気を取られたりすると、見なければならぬ大切なものを見ることができなくなってしまいます。関心は自分自身ではなく、常に御子イエシュアにあるべきです。イエシュアから目を離すことなく、イエシュアだけを仰ぎ見、イエシュアに私たちのまなざしをしっかりと固定しなければなりません。そのことが、「ルベン」(רַבֵּן)という名前が啓示していることなのです。

(2) 「シメオン」・・・「(子に)聞け」

●レアの二番目の息子の名は「シメオン」(「シムオン」שִׁמְעוֹן)です。レアは「主は私が嫌われるのを聞いて、この子を私に授けてくださった」と言って、その子をシメオンと名づけたとあります(創世記 29:33)。しかし、「シメオン」の名は明確にキリストを証している名前なのです。

●申命記 6章 4節に、有名な「シエマ・イスラーエール」(שְׁמַע יִשְׂרָאֵל)があります。「聞け。イスラエルよ。」という意味です。「シエマ」(שְׁמַע)とは、「シャーマ」(שָׁמַע)の単数命令形です。つまりイスラエルが集合名詞(単数)として扱われているわけです。ところが、複数の命令形の場合は、「シムウー」(שִׁמְעוּ)となります。ですから、「シメオン」(正確には「シムオン」שִׁמְעוֹן)の意味を、「あなたがたは聞け」と解釈できるのです。

●イエシュアは三人の弟子(ペテロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネ)を連れて高い山(ヘルモン山)に連れて行きました。そしてそこでイエシュアは変貌しました。つまり御子が本来の姿になったのです。「顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」とあります。弟子たちの目には白く輝くばかりでイエシュアの姿は見えませんでした。ところがそのとき天からの声を聞いたのです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 17章 5節

・・・すると見よ、雲の中から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け」という声がした。

●「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」という天からの声は、すでにイエシュアが公生涯を始められる時に語られています(マタイ 3:17)。しかしこの箇所では、その後に「彼の言うことを聞け」と言う声がつけ加わっています。ここでの「彼」とはイエシュアのことです。なにゆえに彼の言うことを聞かなければならないのでしょうか。それは、イエシュアが「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)と語っているように、御父と御子がひとつ(同一の本質=「エハーッド」אֶחָד)だからです。

【新改訳 2017】 ヨハネの福音書 5章 19節

・・・「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、

自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。

- イエシュアの語ったことば、イエシュアがなされたみわざは、彼自身のものではなく、すべて御父のことばであり、御父のみわざでした。

(3) 「レビ」・・・「(御子と)結びつく」

- レアの三番目の息子の名は「レビ」(「レーヴィー」^{לֵוִי})です。レアはまたもや「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。私が彼に三人の子を産んだのだから」と言って名づけたのが「レビ」でした。この名前の中に、夫を自分に結びつけることに必死なレアの姿を見ますが、実はこれもキリストを証言する名前なのです。

- 御子イエシュアを見、そして彼の声に聞き従うことを別のことばで表現するなら、それは「とどまる」ということばになります。ギリシア語では「メノー」(μένω)ですが、それは緊密な親しいのちの交わりを意味するとても重要な言葉で、それは結ばれているのちを共有する伴侶となることです。花嫁が花婿と結婚することを意味します。御父と御子が一体であるように、御子と私たちが花婿と花嫁のように一体となることを意味します。

- この「メノー」(μένω)をヘブル語に換言するなら、それは「アーマド」(אָמַד)となり、「共に堅く立ち続けること」を意味します。あるいは「メノー」(μένω)は、「知る」を意味する「ヤーダ」(יָדָע)とも言い換えられます。聖書の夫婦の愛の交わりは「知る」ということばで表されます(創世記 4:1)。同様に、「神を知る」ことは「神と心をつににする」ことであり、神と共感し、神と連帯することを意味します。そしてそれは御父と御子が一つであるような一体、つまり「エハーッド」(אֶחָד)を意味します。これが「永遠のいのち」と言われるものです。

- このように、「レビ」という名前には、神のご計画とみこころ、御旨と目的が啓示されていると言えます。やがてはイエシュアによって天と地が一つとなり、神と人とが、すべてのものが共にひとつの家に住むようになるのです。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 1 章 10 節

時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。

※「一つに集められる」と訳されたことばの意味は「ともに向い合わせる」(「カーヴァル」^{קָבַל})と解釈できます。つまり、すべての被造物がイエシュアと「結び合わされる」のです。

(4) 「ユダ」・・・「(御子を)賛美する」

●レアは立て続けに四人目の子を産みます。そしてその子の名をユダ(「イエフーダー」 יהודה)と名づけました。それは「今度は、私は【主】をほめたたえます」という意味ですが、レビのときの切迫感をもった「今度は」とは異なり、ここではむしろレアの優越感を感じさせる「今度は」を感じさせます。つまり、妹ラケルに完全に勝利できて、夫の愛は今や自分に向けられることを確信した名前のようです。実に、自分勝手な意味の名前と言えます。ところがこの名前もキリストを証しする名前となっているのです。主を賛美すること、主に感謝することが「ユダ」という名前が示している意味です。

●神のご計画が御子イエシュアによって実現される時が来た暁には、天においても地においても、爆発的な神への賛美が湧き起こります。すでに御子イエシュアがこの地上に誕生されたときにも、天の軍勢が現われて次のように賛美しました。

【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 13～14 節

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

●これは「天軍賛歌」と言われるものですが、特に 14 節の内容はきわめて深く、預言的内容を含んでいます。歌の中にある「栄光」ということばの意味、「平和」ということばの意味が分からないと、この歌をたとえ歌えたとしても理解できません。「栄光」のヘブル語は「カーヴォード」(קָבוֹד)ですが、この言葉には「輝き」という意味の他に、「重い」「重くする」という意味があります。つまり、天におられる神にとって「重い事柄」ということになります。この栄光が現わされることを「シャハイナ・グローリー」とも言います。つまり、神の重い事柄が目に見える形で現わされることを「神の栄光が現われる」と表現しています。

●神にとって、「重い事柄」とは何でしょうか。それは、神が天と地を創造される前から持っておられた「重い事柄」です。それは、**神が人とともに住む(インマヌエル)**ということではなくて何でしょうか。それはかつて「エデンの園」において実現していましたが、人が罪を犯したことによって、それを失い、人はエデンの園から追放されてしまいました。だからといって、「神と人がともに住む」ということを神が放棄されたわけではありません。それをどのようにして回復し、実現するかを、神は長い時間をかけて、また選民イスラエル、あるいは教会を通して、また、幕屋、神殿、教会、御国、メシア王国という概念を通して啓示して来られました。**これらはすべて神と人が共に住む神の「家」の概念**です。

●「神と人とがともに住む」ことがこの地上に実現することでもたらされるあらゆる祝福の総称が、「平和」ということばで表されます。これがヘブル語の「シャーローム」(שָׁלוֹם)の意味です。この「平和」(「シャーローム」)の語源は動詞の「シャーレーム」(שָׁלַם)で、それはこの地上に「神のご計画とみこころ、御旨(=神の喜び)と目的が実現・成就すること、完成すること」を意味しているのです。この祝福を受ける

のは、神のみこころにかなう人々(イエシュア・ハマシアッハを信じる人々)です。

●「主の祈り」にある「御国が来ますように」という祈りも、神の「重い事柄」がこの地に実現するよう
にという祈りです。地は、天にあることの写し(コピー)ですが、やがてイエシュアが再臨されると、天と
地が一つになります(エペソ 1:10)。つまり地は天の写しではなくなり、すべてが天の実体となるのです。
詩篇にある多くの賛美は本来的にそこに向けられた賛美なのだと考えるなら、詩篇が神のご計画における
キリストを証言する預言書だということが見えてきます。

ベアハリート

●神のご計画の完成の時ににおいて、必然的にメシアによる統治・支配のための「さばき」がもたらされま
す。これはヤコブの五番目の息子である「ダン」(דָּן)の名前の語源となっている「ディーン」(דִּין)という
言葉にあかされていますが、それについては今回取り扱わないでおきます。なぜなら、レアが四人目の
ユダが生まれた後に、「**彼女は子を産まなくなった**」(創世記 29:35)と記されているからです。実際は、あ
と二人の息子(イッサカルとゼブルン)を産むことになるのですが、なぜ「**彼女は子を産まなくなった**」と
聖書は記しているのでしょうか。それはレアから生まれた「ルベン」「シメオン」「レビ」「ユダ」の四人の
息子が生まれたことで、御子イエシュアの証しが、ここで一つの括り(完結された証言)となっているから
ではないかと考えられます。つまり、それら四人の名前をして、イエシュアを通してなされる神のご計画
の全体像の大枠として証しされているからではないかと思われれます。

●四人の名前の中に、「**御子を見よ**」(ルベン)、そして「**(御子に)聞け**」(シメオン)、そうするなら「**(御子
と)結びつき**」(レビ)、「**(御子を)賛美する**」(ユダ)するようになるという一連のメッセージが浮かび上がっ
て来ます。そして今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」はここまでにしておきます。まだ八人の息子た
ちの名前のミドゥラーシュが残っています。どのようなキリスト証言が彼らの名前の中に隠されているの
かを探し求めなければなりません。しかしそれは別の機会に、あるいは次回の例会で取り上げることにし
たいと思います。

2018.1.29

第14回 ヘブル・ミドゥラーシュ例会
空知太栄光キリスト教会牧師: 銘形 秀則